

共同運営部門：リハビリテーションセンター

—関係部署—

役 職	スタッフ名
センター長兼外傷機能外科部長	小野 秀文
技術科長代理(理学療法士)	石田 恭子
技術科長代理(理学療法士)	津野 光昭
主査(作業療法士)	安江 優美
主査(言語聴覚士)	一柳 律子

—概要—

リハビリテーション科では医師1名、理学療法士23名、作業療法士11名、言語聴覚士4名、事務員2名を配し、急性期の患者を中心にリハビリテーションを実施している。

リハビリテーション科の診療基準は、運動器リハⅠ、脳血管リハⅠ、心大血管Ⅰ、呼吸器リハⅠ、廃用リハⅠ、がんリハⅠの施設基準を取得している。また土日、祝日の運用も行っており周術期の患者に対し、継続リハビリテーションの提供を行っている。

【理学療法部門】

理学療法部門では、各診療科において急性期の患者を中心に入院直後より積極的な介入を行っている。入院患者以外にも心臓リハビリテーションの外来を毎日実施すると共に患者の個々の運動能力に応じた運動処方を行えるよう心肺運動負荷試験(CPX)の実施も行っている。また院内の活動では、呼吸サポートチーム、緩和ケアチーム、糖尿病教室や生活習慣病教室への参加を積極的に行っている。

【作業療法部門】

作業療法部門では、患者の日常生活動作の改善を目標にリハビリテーションを施行している。それと共に日常生活動作の方法を安全に施行する為のパフレットの作成や福祉用具の紹介、提供も行っている。また院内の活動では認知症ケアセンターへの参加を行い、認知症患者への介入も行っている。また褥瘡予防にも取り組んでおり、病棟スタッフへの研修会も実施している。

【言語聴覚部門】

言語聴覚部門では、脳血管障害の患者を中心に嚥下障害、高次脳機能障害、失語症へのリハビリテーションを実施している。院内の活動では、病棟看護師と協力し摂食嚥下療法にも取り組むと共に、病棟スタッフに対し摂食嚥下の研修も行っている。

—実績—

(表1)2018年度リハビリテーション科実績

	新患数(延べ人数)	実施単位数
理学療法部門	51,631名	79,048単位
作業療法部門	24,920名	40,913単位
言語聴覚部門	15,056名	11,640単位
心臓リハ外来	7,673名	2,301単位

理学療法、言語聴覚部門において新患数、実施単位数共に昨年より増加を認めた。全体でも前年比1.7%の単位増であった。今年度の傾向として昨年と同様に重傷患者の割合が高く、救命診療科、脳血管外科、整形外科、循環器等の合算した割合が全体の70%となっている。また今年度より外来心臓リハの定数を3名から4名に増加したことにより実施単位数が増加した。

—今年度の成果と反省点—

理学療法部門では、昨年に引き続き各診療科において病棟責任者を置くことで医師および、病棟とのコミュニケーションの確立や責任の所在を明確にすることができた。特に救命領域、ICUにおいては毎朝の申し送りにも参加し情報共有を密にすることが出来た。各診療科においてでも早期からのリハビリ介入が可能となり廃用症候群の予防に繋げることが出来たと考える。

作業療法部門では、認知症ケアセンターへの参加を積極的行うと共に泉佐野市での認知症事業にも職員を派遣することで行政との密接な関わりを構築することが出来た。また救命領域では、人工呼吸器抜管後のせん妄に対しての介入を継続して行うことが出来た。

言語聴覚部門では、昨年に引き続き、病棟と協力をを行い、摂食嚥下療法および高次脳検査の件数を増加させることができた。

—来年度への抱負—

理学療法部門では周術期の患者に対し質の高いリハビリを提供していくと共に、外来心臓リハビリをさらに増枠し高い稼働率を維持していく。作業療法部門では救命診療領域においてせん妄ハイリスク患者への介入を行っていく。言語聴覚部門では昨年に引き続き摂食嚥下と高次脳機能等の検査数の増加を目指していく。リハビリテーションを通じて教育システムの再構築をはかり質の高い医療を提供していくと共に、学会等にも積極的に参加をして行きたいと考える。